

先哲に学ぶ人間学

いい機会・いい場所・いい人・いい書物に出逢うこと

令和三年一月八日

税理士法人 中央総研 山川 晋

若さの本質は、感激する心と、自己変革の可能性にある。然るに、錯覚した青春を後で泣く愚者がいる。

飯塚 毅

不注意の用意。

東西南北（青、白、赤、黒）

幸せは、希望者のみに、もれなく当る。

修養団

中山 靖雄

深沈厚重は、是れ第一等の資質。磊落豪勇は、是れ第一等の資質。聰明才弁は、
是れ第三等の資質。

呂 新吾

学問の要訣は、ただ八個の字にあり。徳性涵養、氣質変化。

呂 新吾

天下の治乱は、只相責め、各々尽くすの四字にあり。

呂 新吾

奮始怠終は修業の賊なり。躁心浮氣は蓄徳の賊なり。疾言厲色は処衆の賊なり。

呂 新吾

人生は、心一つの 置き所。

中村 天風

どこまでも、まず人間をつくれ。それから後が経営であり、あるいは事業である。

中村 天風

私は今後かりそめにも、吾が舌に悪を語らせまい。否、一々吾が言葉に注意しよう。同時に今後私は、最早自分の境遇や仕事を、消極的の言語や、悲観的の言語で、批判する様な言葉は使うまい。終始、樂觀と歡喜と、輝く希望と潑剌たる勇気と、平和に満ちた言葉でのみ生きよう。そして、宇宙靈の有する無限の力をわが生命に受け入れて、その無限の力で自分の人生を建設しよう。

中村 天風

他人が喜ぶような言葉や行いを、自分の人生の楽しみとする、という尊い気分になつて生きてごらん。今日から。

中村 天風

「千万人と雖も吾往かん」と言つた孟子が同時に別面において「豈に綽々余裕有らざらんや」と言つて余裕というものを論じておりますが、こういう乱世になればなるほど、われわれは余裕というものを持たなければならない。余裕があつて初めて本当に物を考えることが出来る、本当に行動を起こすことも出来るわけです。殊に善人は神経が細いから、尚更本当の意味の余裕が必要であります。

本当の学問や修養といふものはこれは禅でも儒でも同様で、人間と人間、精神と精神、人格と人格が火花を散らす様にやる。これを参考道、参すると言う。分かつたのか、分からぬのか、ノートをとつて、又それを受け売りする、などというような学問や学校勉強は、これは雑学・俗学というもので、所謂学問・求道の中には入らない。

とにかく人間といふものは、栄えようと思つたならば、まず何より根に返らなければいけない。草木でも、本当に健やかに繁茂させようと思つたならば、いたずらに枝葉を伸ばしては駄目で、幹を逞しくし、根を深く養わなければならない。根に返ることが大事である。

本当の学問といふものは、血となつて身体中を循環し、人体・人格をつくる。したがつて、それを怠れば自ら面相・言語も卑しくなつてくる。それが本当の学問であり、東洋哲学の醍醐味もまた、そういうところにあるわけであります。

煎茶道に於けるお茶席の設え、その極致について少し触れます。

元来、お煎茶の設えには、お茶室を飾り、客人をお招きするという世界と、もう一つ対となる考え方として、自ら茶器を携え、客人を求めて外へと出向いてゆくという世界、その二種類がございます。

出向いてゆく場合、当然、茶器を担ぐことで手一杯となり、席の飾り等は、その場その場で調達することになります。

路傍の石に美を認め、野に咲く花に景色を借りて、朽ちた古木で結界を張ります。捨て身にも似た極限の世界に於いて、頼りになるのは己の審美眼のみです。

そして、ありふれた道すがら、突如非日常たるお茶席が出現し、道行く人が足を止め、客となつて甘露の雫を堪能します。客が客を呼び、賑わいと共に日が暮れ、翌日、立つ鳥跡を濁さず、何事も無かつたかのように、路傍の石と朽ちた古木は魔法を解かれ、元の様へと戻っています。

そして、昨日の客人は、ありふれた道すがら、あの美しき虚構の世界を偲ぶのです。

出向いた先で見つけ出す天然素材は、大抵、その地に暮らす人々には見慣れた平凡な物かも知れません。しかし、そこに常日頃養った美意識をもつて発想を転換し、單なる素材を調度品へと変える力を備えた時、その場限り、一期一会のお茶席を構築することが可能となるのです。

これは、煎茶家として高みに到達した方々の極致であり、日常なのかも知れません。

令和3年（2021年）を迎えて

“極陰は陽に転ずる”森信三先生が、1990年に21世紀の予言をなさっています。「混迷を突き抜け、2025年から上向きな日本民族になる。そして2050年、そのとき列国は日本の底力を認めざるを得なくなるだろう」と。

20世紀の初めには人種の不平等は当然であり、むしろ正義であると思われていた。

しかし、日露戦争での日本の勝利は、有色人種が白人に勝った歴史的偉業を成し遂げ、全世界の有色人種に限りない自信と誇りを与えました。大東亜戦争に日本は、負けたとはいえ、アジアの国々を解放し、植民地は完全になくなりました。日本人の血と汗と涙の結晶と言つていいでしょう。20世紀の半ばのことです。

昨年、令和2年は、『武漢コロナ』という、志那が世界にばら撒いた犯罪的行為が、政治・経済・社会に甚大な被害をもたらしました。

『武漢コロナ』は、志那のウイルス研究所が発生源で、人工的に作られた可能性が高いと、大村智（ノーベル生理学・医学賞受賞者）が語っておられます。

盗人猛々しいとはこのことで、志那は現地視察の受け入れを拒否し、反省どころか、他国に責任を転嫁する始末です。

さて、この歴史的変化ともいえる、令和3年を我々社長は、どう対処すればいいのでしょうか。

「千万人と雖も吾往かん」と言った孟子が、同時に別面で「豈に綽々余裕有らざらんや」と言って余裕の大切さを論じている。こういう乱世になればなるほど、余裕があつて初めて本当に物を考え、本当に行動を起こすこともできる。と安岡正篤先生も教えて下さっています。

社長、心の余裕はありますか？

社長、身体の健康に余裕はありますか？

社長、経済的に余裕はありますか？

無いから、困っているのだ！有れば、心配するか！という、怒りにも似た声が聞こえて来そうです。

しかし、冷静に考えれば、今までの考え方や行動を根本的に反省し、社長自から姿勢を変えていく外ないことが分かるはずです。

他に原因を求めている限り、解決の糸口は見つかりません。

幸い、我々日本人のDNAには、コツコツ努力すること、決して諦めないこと、そして再出発をする勇氣があります。

社長！よしやるぞ、今からだ！と、生まれ変わる位の氣合を入れて頑張りましょう。我々中央総研も、桁違いの意氣込みで社長を支えて参ります。



今月のポイント

新しい時代の幕開けの年！！